

日露戦争の第一の特徴は、絶対不敗と信じられていた白人種のキリスト教徒が黄色人種の異教徒に敗れたことであった。当時の有色人種は白人種の支配下にあり、アフリカの黒人やアジア・アラブの諸民族は、奴隷か召使いとしてしか存在を認められず、さらにかリブ海やメキシコなどではインディオが、オーストラリアではアボリジニが動物視され、狩りの対象とされていた。

孫文は、「日本がロシアに勝った。これはアジア民族のヨーロッパに対する勝利であり、アジアの諸民族は非常に歓喜し、大きな希望を抱くに至った」と神戸で演説したが、日露戦争の日本の勝利が中国では日本への留学熱を高め、一九〇五年には留学生は一万二千人に達した。そして孫文は日本への留学を通じて啓蒙された青年たちを率いて辛亥革命を実現し、中国に最初の近代的国家を誕生させたのである。

新地球 日本史

▶▶ 48

明治中期から第二次大戦まで

力には、西欧諸国に反撃できる有色人種の国は一国もなかった。このため、これらの有色人種は殺戮されるか、植民地とされて働かされるか以外に選択肢のなかった時代であった。この西帝国主義の植民地化の波が、ユーラシア大陸を越えて朝鮮半島に迫ってきたときに、有色人種の日本が立ち上がり、初めて白人種を破り、有色人種が反撃に転じた。それが日露戦争であった。

日露戦争—西洋中心史観への挑戦

アジアを目覚めさせた勝利

して初めて歯止めをかけた。なぜ日本がそれをなしたか。答えは東京にある。中国、朝鮮、インドからの留学生で東京は溢れている。日本に学べ」と、若者を日本に留学させる「東遊運動」を始めた。二百五十人余の若者を日本に送り、王子のコオデ・デ侯までもが独立を夢見て亡命してきた。またハノイには慶應義塾に倣って「トンキン義塾」も創設された。

フィリピンでは日本海軍の勝利のニュースが伝わると、日本のマニラ領事館に多数の祝電が寄せられたが、のちに国会議員となったエンリケ・コポラウは、「アジアの時代が来た。アジアがヨーロッパに

対して立ち上がる時が来た」と歓喜したと書いている。

インドの新聞「サメイ」紙は、「日本が西欧との闘争に勝利したことを誇りに思う。われわれは心から日本人の勇氣と規律、鉄のような意志、不屈の力によって勝利を収めた日本に心からの祝意を贈る。日本だけがアジアの名譽を救った」と報じた。また「ヒタバデー」紙は、「インドのようなおとなしい羊でも虎に身でできる。我々は羊が虎にはなれないという過ちに気がついた。日本の勝利がインド人を覚醒し、英国と対等という前向きな思想に目覚めさせた」と報じた。

ニューデリー大学のアー・デューア教授は、日本の勝利はインドの未来に強い希望と自信を与え、一九〇六年十二月には国産品愛護のスワデーシ、英国製品のボイコット、自治要求のフラーシと国民教育促進の四綱領が採択された、と日露戦争がインドに及ぼした影響を高く評価している。

■ 1 204/08/30

ベトナムのファン・ボイ・チャウは、「日露大戦の報、長夜の夢を破る」「日露戦役は実に私達の頭脳に「世界を開かした」と回想録に書いている。彼は福沢諭吉の『学問のすすめ』に大きな影響を受け、「米国の虎やヨーロッパの鯨の横暴に対して、黄色人種と

一方、インドのジャワーハルラール・ネール首相は、「私が若い頃に日露戦争があったが、日本勝利のニュースを見たくて、新聞が待ち遠しかった。また大國ロシアに勝った日本を知りたくて、日本に関するあらゆる本を読んだ」「日本の勝利は、アジアにとって偉大な救いであった」と回顧している。

このように、日本の勝利は世界の虐げられていた諸民族の独立への夜明けとなり、人種平等や民族国家独立への道を歩ませたのであった。

(元防衛大学校教授 平間洋一)

日露戦争が始まると数多くの日本や日露戦争に関する本が出版された。エジプトではカーミルの『昇る太陽』が出版されたが、カーミルは、日本のように一致団結すれば、エジプトも英国から独立を戦いとる事ができることを教えるためにこの本を書いたという。

天皇を中心に団結して大ロシアを破り、世界に明るい希望の光りを灯した日本を讃える『ミカド・ナーメ（天皇の書）』が出版された。イラクでは詩人のアツルサーフィーが「対馬沖海戦」を、レバノンでは詩人、アツルディーンが「日本人とその恋人」を書いた。アフマド・フアドリーは、桜井忠温の「肉弾」を一九〇九年に翻訳したが、これがアラビア語に翻訳された最初の日本の本であった。

新地球

日本史

明治中期から第二次大戦まで

▶▶ 49

いう詩を作ったが、この詩はエジプトだけでなく、レバノンの教科書にも掲載された。現在でもインターネットの日本・アラブ通信に「新アラブ千一夜（第一夜）」として掲載されている。

イランではシーラーズイの「東方から何という太陽が昇ってくるのだらう。この昇る太陽で全世界が明るく照らし出された」と

日本の勝利がトルコの祖国解放運動、ケマル・アタチュルクのトルコ革命に連なっていた。

アラブに「日本に習え」の波動

ものと考えております」と、日本への期待を表明した。

さらにイスラム圏では、日本にイスラム教を広げ、

一九二一年三月にはヘチアスの王族、アルカデリーが、イスラム民族連盟の極東駐在代表として来日し、イスラム教徒代表者会議で、日本を盟主と仰ぐことが決議されたと伝えた。

天皇をカリフ（盟主）としてイスラム世界に強力な求心力を回復し、西欧の侵略に対抗しようとする動きが高まった。一九〇五年には、日本がもしイスラム国家となれば、明治天皇をカリフとするのが適当であり、それによりイスラム諸国の団結が強固になるであろう、という論文が『イジュティハート』誌に掲載された。イランからはタバタバーイーらの立憲派学者が、天皇に電報を打ち、イスラム社会への支援と保護を求めた。

このようなイスラムの働きかけを受け、日本でも一九〇九年にアツア主義者の頭山滿、内田良平、大原武慶らと、アフマド・フアドリー、ハムンド・バラカトゥッラーらが、イスラム教の布教とアツアの共同防衛を目的として、亜細亜協会を結成した。さらに一九二一年十月には中央アツアの回教徒と連携するために、大亜細亜協会が設立された。これらパン・イスラム主義者たちの日本イスラム化計画は、一九三八年に東京・代々木にモスクを建立し、その四カ月後に前首相の林銑十郎大将を会長に、大日本回教協会を発足させたにどどまった。

一方、トルコでは観戦武官、ペルテウ・バシヤが『日露戦争』『日露戦争の物質的・精神的教訓と日本勝利の原因』を刊行し、日本軍の勇敢さや国民の一致団結を讃え、「国家の命運は国民の自覚と愛国心で決するものであり、トルコも日本を見習い近代化を進めるならば、決して悲観すべきでない。国家の命運は国民にあり」と訴えた。そして

■2

また、日本への布教とイスラム圏との協力を探るために、トルコ皇帝の内命を受けたイブラヒムが来日し、「われわれの目的は日本にイスラムを広めるとともに、東洋の覚醒と統一をはかり、東洋の文化を残忍な西洋の侵略者から防衛するために協力することです。日本の進歩と発展は全東洋世界の願望であり、今日、東洋人はみんな己の生存を日本人の生存と一体の

しかし、日本とユラシア回教徒との連携は、一九三〇年代に入ると加速し、中央アツアのパミール高原に近い新疆のカシュガルを中心にイスラムの独立国を作ろうと、回教徒が多いホフホトに西北回教連合会本部を、包頭、大同、張家口にその支部を設立した。

日露戦争—西洋中心史観への挑戦

（元防衛大学校教授

平間洋一）

ポーランド人は、日露戦争がロシアのポーランド支配に変化をもたらすと期待し、独立派リーダーのピウスツキが来日した。ピウスツキは海外にいるポーランド人によるポーランド部隊の編成、武器や資金の提供、ロシア軍に関する情報提供や攪乱工作などを申し出た。これに対して日本は、ヨーロッパの複雑な国際政治に巻き込まれることを恐れ、ポーランドへの援助は小規模なものにとどめた。このささやかな援助が

好機を利用し一九一七年十二月に念願の独立を達成した。このとき立ち上がったのが、帝政ロシア軍の騎兵旅団長として春先の会戦で敗北したマンネルヘイム大佐であった。大佐はこの敗北から、日本のような小国でも国民が団結すれば大ロシアにも勝てるとの自信を得たのである。

その後、フィンランドはカレリア地方の割譲をめぐってソ連と二回戦い二回と

新地球 日本史

▶▶ 50

明治中期から第二次大戦まで

ポーランドの独立にどのよ
うな奇与をしたかは明らか
でない。

しかし、日露戦争から十
三年後の一九一八年十一
月、第一次世界大戦の停戦
協定によりポーランドが独
立を認められ、ピウスツキ
が大統領に就任すると、日
露戦争で活躍した五十一人
の日本軍指揮官に「軍徳勲
章」が贈られた。

一方、フィンランドもロ
シアの支配下に置かれてい
たが、日本の勝利に触発さ
れて帝政ロシアが崩壊した

北欧解放とソ連誕生…そして

フィンランド人のこうし
た独立心と抵抗心が、ソ連
に国境を接しソ連の重圧を
受けながらも、冷戦中にソ
連の衛星国にされず、議会
制民主主義を維持したので
あった。

レーニンは旅順陥落の三
日後に、機関誌『ペリヨ
ード』に「旅順の降伏はツ
アーズム降伏の序幕であ
る。革命を信じない者たち
が、革命を信じ始めたこと
は、革命の始まりである」
と書いたが、その直後の一
九〇五年一月二十二日に、
皇帝に食料や燃料などの不
足を訴えようと宮殿に集ま
った多数の市民が警備兵に
虐殺される「血の日曜日」
の惨事が起こった。この事
件を境に革命の波は全国に
広がり、レーニンの予言通
りに革命の歯車が止まるこ
となく回り始めた。

国際共産主義運動であり、
その指揮中枢がモスクワの
コミンテルンであった。コ
ミンテルンが特に重視した
のが、国内が軍閥に支配さ
れ混乱している中国であっ
た。

コミンテルンは東方の国
境の安全を確保するため、
中国に共産党を創設させて
国共合同を推進し、日中講
和の機会を妨害して日中戦
争を継続させ、日本を太平
洋戦争へと追い詰めていっ
た。

そして、第一次世界大戦
末期の一九一七年には、
「二十世紀の怪物」といわ
れた共産主義国家のソビエ
ト社会主義共和国連邦が誕
生した。西欧諸国から警戒
され内政干渉を受けたソ連
は、その対策として各国の
労働者や世界各地の民族独
立運動を支援し、資本主義
諸国やその植民地に紛争を
誘発しようとした。これが

一方、孤立した日本をド
イツと結びつけたのは、一
九三五年の第七回インター
ナショナル大会の「日独を
コミンテルンの敵」とする
宣言で、日独はこれに対抗
するため一九三六年に「日
独防共協定」を締結した
が、日独伊三国同盟を押し
進めたのがヒトラーであっ
た。ヒトラーは「日本海軍
戦があったのは、私が中学
生のときだった。クラスの
ほとんどすべてがオースト
リア人で、（ロシアの）敗
北のニュースに落胆した。
しかし、私は歓声を上げた。
それ以来、私は日本海軍
軍に対して特別な感情を持
った」と回想しているが、
ヒトラーのこの日本海軍へ
の過大な期待が、ヒトラー
を日本に近づけ、日独伊三
国同盟を締結させ、それが
日本に太平洋戦争を不可避
とさせたのであった。

■ 3

日露戦争—西洋中心史観への挑戦

(元防衛大学校教授
平間洋一)

米国の黒人たちは、日本

の勝利を自分たちの勝利のように誇りに思い歓喜し、日本が白人優位を覆し、有色人種を解放してくれるであらうと夢想した。特にのちにアフリカ独立の父といわれたウィリアム・デボイスは、「日本がヨーロッパに圧迫されているすべての有色人種を救出してくれる。有色人種は日本をリーダーとして仰ぎ従うべきである」と主張した。

黒人の新聞「ニューヨ

理と考えられていた。

この人種観を科学的に補強したのが、ダーウィンの「弱肉強食」の進化論を国家や民族に適用したスペンサーの「社会進化論」であった。そして、当時はルーズベルト大統領も「すべての戦争の中で最も正しいものは野蛮人との戦いだ」「ロレーン地方がドイツのものになろうと、フランスのものになろうと、たいした問題ではない。しかし、米国やオーストラリアが赤

新地球

日本史

51

明治中期から第二次大戦まで

や黒や黄色の土着民の手を離れ、世界の有力民族の遺産となることは極めて重要だ」と書いていた。

クエイジ」紙は、「行け、黄色い小さな男たちよ。天罰を加えるまではその剣を側に置くな。欲望の固まりのロシアを投げ飛ばせ」との詩を掲載した。

しかし、この黒人や有色人種の期待こそ白人種が最も恐れた「黄禍論」であった。すなわち日露戦争当時、米国や西欧諸国を支配していた人種観は、アングロサクソン民族が世界で最も優れた民族であり、野蛮で遅れた異教徒をキリスト教に改宗させることは、神の撰

「黄禍論」生み、日米対立へ

戦争後にはホーマー・リーの『無智の勇氣』に代表される多数の反日・恐日論の本が出版された。

一方、ルーズベルト大統領の代弁者で海軍戦略家のマハン大佐は、「日本移民の流入を傍観するならば、十年もたたないうちにロッキーマン脈以西の人口の大半が日本人によって占められ、同地域は日本化されてしまふであらう」「太平洋に面した大海軍国家は日米

しかなく、日米が直接対立する可能性が一段と高まった」と黄禍論を利用して海軍軍勢力増強の必要性を訴えた。

さらにマハン大佐は、ノックス國務長官が再び中国の門戸開放宣言をする時、一九〇九年に「門戸開放政策」との論説を発表し、日本は中国や満州の市場に關心を強め、満州鉄道中立化提案を拒否し、日露協商を締結するなど、独占欲にむしばまれていると批判した。

米国のアジア政策は、自国の支配下地域には他国の進出や干渉を許さないモンロー主義という覇権主義と、その対極にある積極的な進出政策の門戸開放・機会均等政策を、軍勢力を背

景に推進するもので、米国の東洋進出は「マハンによって鼓舞された海軍力の増強は国家に威信と利益をもたらす」という海軍モンロー主義のユーラシア大陸への拡大であった。

視点を変えれば、米国海軍のアジア進出は、モンロー・ドクトリンのアジアへの適用であり、それはヘイ・ドクトリンという錦の御旗を掲げ「西へ西へ」と海外市場を求め、海のフロンティアを征服していった海上開拓史でもあった。

また言葉を換えれば、インディアンを征服し、西海岸に到達した米国が、太平洋を西進し遭遇したのがアパッチ族ならぬ日本海軍であり、この「西へ西へ」の潮流が激突したのが、海軍史的に見れば太平洋戦争ではなかったか。

そして、太平洋のアパッチが消えると、米国海軍は、「米国および同盟国の死活的重要な權益に挑戦するいかなる動きも米国の軍勢力と対決することを理解させるため」に、第七艦隊を冷戦中は日本海、台湾海峡、ベトナム沖へと派遣した。そして、冷戦でソ連を破ると、アフガニスタン紛争ではインド洋、イラクのクウェート侵攻やイラク戦争ではペルシヤ湾から紅海へと西進を続け、今日に至っている。

■4

日露戦争—西洋中心史観への挑戦

(元防衛大学校教授

平間洋一)

日露戦争に勝利した日本には、独立を夢見てフィリピンのリカルテ、中国の孫文、インドのビバリ・ボース、ビルマ（現ミャンマー）のオッタマ、ベトナムのファン・ボイ・チャウ、中近東からはバラカトウツラーやクルバンアリーらの民族主義者が亡命してきた。

徳富蘇峰は日露戦争終了の翌年に「黄人の重荷」を発表したが、これは英国の詩人、キプリングの「白人

むことを提案したが、この提案は複雑な国内問題であると、門前払いの形で却下されてしまった。

この人種平等法案の提出が有色人種を勇気づけ、アジアやアフリカで、人種平等や独立を求める反植民地闘争が開始された。しかし、強力な西欧諸国の軍事力の前にごとごとく弾圧され、これら諸民族が植民地支配から脱することはでき

新地球 日本史

明治中期から第二次大戦まで

52

の重荷」の対極として作られたものであった。徳富は

「日露戦争の勝利が有色人種に与へた影響を無視する能はず」と、日本が有色人種に対して負うべき責務を強調したが、明治・大正・昭和の先人たちは、これら亡命者を受け入れ、庇護し支援した。

第一次世界大戦が終わると、パリ平和会議が開催され、国際連盟が誕生した。日本は有色人種の国として唯一参加し、会議で人種平等条項を連盟規約に盛り込

なかった。

これを打破したのが、第二次世界大戦であった。東南アジアの民衆は、昨日まで不敗と信じていた白人種が、日本軍のたったの一撃でもろくも崩れ去ったのを目前に見てしまった。この戦争初期の日本軍の快勝は、日露戦争のときと異なり、知識人だけでなく一般民衆にも独立への自信を与えた。さらに日本が唱えた

民族国家独立の夢はぐくむ

「アジア人のアジア」のスローガンや大東亜宣言が独立への夢を与えた。しかし、日本は三年八カ月後には敗退した。

日本軍が降伏すると、英仏蘭などの諸国は、植民地の奪回を目指して軍隊と行政官を復帰させようとした。しかし、かつての植民地に西欧諸国が復帰することはできなかつた。日本軍が育成した義勇軍が、日本で教育を受けた南方特別留學生や民族独立に目覚めた民衆が、一斉に立ち上がったのである。

西欧の史書は、フランス革命が国民国家（民族国家）を成立させたとしているが、民族国家独立への夢をアジアやアラブ、アフリカの国々に与えたのが日露戦争であり、その夢を実現させるために立ち上がりさせる衝撃を与え、民族国家を建国させたのが、マッカーサーによって使用を禁止された「先の大戦」と呼ばれる「大東亜戦争」ではなかつたか。

アラブの民族主義指導者たちは、一九四五年にはアラブ連盟、一九四七年にはアジア関係会議、一九五五年には二十九カ国が参加してバンドン会議を開催した。この会議に米ソを含む白人国家は排除されたが、ソ連は「半植民地の輝かしい会議である」と熱烈な支持を表明した。

これに対して米国は、民族主義者の独立戦争を共産主義との戦いと位置付け、西欧植民地国家を支持し、共産主義と戦うためにSEATO（東南アジア条約機構）を結成した。しかし、インド、ビルマ、セイロン、インドネシアなどは加盟しなかつた。

この冷戦期の米ソの代理戦争や新興国獲得競争、国連の誕生などが西欧植民地帝国を揺るがし、多くの地域が国家として独立した。一九六五年までに四十一の有色人種の国が国連に加入し、国連は百七十七カ国に膨れあがった。有色人種の増大が国連の有色人種の発言権を増大し、国連の主要職員も有色人種から選抜されるようになった。

日本の敗北直前に連合国がサンフランシスコに集まり、国際連合が誕生した。しかし、有色人種の国は五十カ国の加盟国中に十一カ国しかなかった。アジアや

種を差別していた米国も、閣僚に有色人種を任命し、ブッシュ政権ではミネタ商務長官やシンセキ陸軍参謀総長が日系人から任命されるまでに変わった。

日露戦争—西洋中心史観への挑戦

（元防衛大学校教授 平間洋一）

■5

太平洋戦争敗戦後、日本の戦った戦争は歪曲され、醜悪なものにされてしまったが、先人が生命を捧げて戦った日本の戦争に一片の正義も大義もなかったのであらうか。われわれの祖先は人種平等や民族国家の独立を「大義」と信じて生命を捧げたのではなかったか。

日露戦争は極東の戦争であつたこと、この戦争で覺醒された諸民族に植民地を奪われたことから、西欧諸国の日露戦争の研究は少なからず高く評価する国も少な

た一九三〇年代以降で、日露戦争当時は「立憲民主国家」の「文明国」と「専制君主国家」の「非文明国」との戦争であると、世界の多くの国は日本を支持していた。

また中国や韓国の非難に影響され、日露戦争で併合された朝鮮や戦場となった満州の民衆の苦難の歴史を重視しなければ「正しい歴史認識」が生まれないと、この面を過度に強調する論者もいる。確かにそのような配慮も必要である。しか



明治中期から第二次大戦まで

い。一方「愛国史観」の中国は日清戦争から日露戦争、さらには沖繩処分も侵略戦争であつたと非難している。

しかし、戦争が罪悪視されるようになったのは、第一次世界大戦があまりにも悲惨な災害をもたらした反省から、一九二八年に締結された不戦条約(ケロッグ・ブリアン条約)以降であつた。また、侵略戦争が非難されるようになったのは

、共産主義国が西欧の資本主義諸国への攻勢を強め

し、歴史は当時の歴史的背景を理解しその時代の価値観で評価すべきであり、現在の価値観やイズムで解釈してはならない。

当時の西欧諸国には有色人種や異教徒に対する強烈な人種の偏見があり、アメリカ大陸のインディアンやオーストラリアのアボリジ

日本非難には英語で反論を

二が動物のように殺戮されてきた。アフリカ大陸からは黒人が奴隷として売られていた。そしてアフリカの黒人が減少して不足すると、「マリア・ルス号事件」の例が示すとおり、中国人がポルトガル商人の手によって苦力として、年々数千人が売られていた時代であつた。

また、西欧諸国の国家・民族観は、ダーウインの「弱肉強食」の進化論を、国家や民族に適用したスペンサーの「社会進化論」を基としていた時代であり、ルーズベルトが「すべての戦争の中で最も正しいものは野蛮人との戦いだ」「英国がエジプトを、フランスがアルジェリアを、ロシアがトルキスタンを支配することは人間性の面からも偉大な進歩だ」「シナはフィリピン人と同様に自治の能力はない。古代に文明を持ったが、今では劣等民族だ」と書き話していた時代であつたのである。

要求」も、一九三〇年代に駐日フランス大使、クロードルが「これらの利権が条約に支えられ、長年の所有によって確認された既成事実であり、それは米国の仲介で締結されたポーツマス条約によって認められたもの」と本国に報告しているとおり、世界的に認められていたものであつた。

対華二十一カ条の要求がこれほど非難され有名になつたのは、ウェリントン・クー(顧維鈞)やアルフレッド・シー(施肇基)ら英語に堪能な外交官が声高に非難し、華僑などが実情以上に拡張して各国語で発信し、さらに中国の非難の矛先を日本の向けたい英国や中国進出をたくらむ米国の思惑などにより拡散したことも無視できない。

現在、中国政府や華僑が総力をあけて、「南京三十万人虐殺説」などの日本の戦争責任を英語で発信しているが、このまま日本が英語で反論しなければ、対華二十一カ条要求や、線路上で泣き叫ぶ子供のやらせの写真が、二十世紀の世界の歴史にされたように、南京大虐殺三十万人などが二十一世紀に世界の歴史として定着してしまうのではないかな。なぜならば、歴史は繰り返し報道され、ドラマ化され、イメージとして定着するからである。

6 104/09/04

日露戦争—西洋中心史観への挑戦

(元防衛大学校教授 平間洋一)